

道元禪師と比叡山にかかわる諸問題

守 屋 茂

道元は十三歳にして、叡山に上り、その後榮西への参学、入宋、深草・興聖寺の開創、北越移錫などのことのため、五十四年の生涯の大半を過しており、この間叡山とのかかわりは、余程深いものがあると思われるが、案外問題視されていないのが現状ではなからうか。かりに問題を提起するにしても、往々文献資料の真偽等の操作に偏って、その社会的環境や、道元の教養や性格を顧みない憾みがないとはい切れない。私は二十数年来木幡に住み、旁々叡山の教育にも係わっている折柄、それなりに一個の所見を持つこととなった。以下主要なる問題について研究の梗概と略述して見ることにしよう。

親父通親・育父通具 道元の親父は通例久我通親とされているが、またその子通具ともされる。通親を父とすれば、母は藤原基房の女ということになり、通具とすれば、母は藤原俊成の女である。何れにしても、母の出自は藤原氏ということには変らない。通具説のおこる資料は、道元が通具忌の供養に当

って、育父としたことに始まる。育父といえは通例育ての親とされるが、諸橋徹次博士が、育父は実父と見てよいとしたことから、実父通具説が登場することとなり、三歳にして父を失うことも崩れる。ところが道元が出家のため、叡山の外叔良観（『建鐫記』諸本は、良顯とするが当たらない）を訪ねた時、良観が誠めていうのに「親父猶父定有^{シテ}其^ニ瞋^ヲ如何」（前掲書諸本同じ）とする。この場合親父・猶父を各々別人としたことは見逃せない。たとえ諸橋博士が、育父は実父と解してよいとされても、道元の場合無理という外はない。ともかくこうして道元は、通親を父として、宇治・木幡の基房ゆかりの地で誕生した。

得度・授戒 三歳にして父を、八歳にして母を失った道元は、尔来外祖父基房乃至は長兄通具に養われていたが、十三歳にして出家の志をたてて、叡山に上り、十四歳にして横川の三条実房の子にして七十年代天台座主となった公円の許にて得度し、次で菩薩戒を受けた。当時公円は横川の寂場（靜坊

を自坊としていたが、道元の得度前後は、東塔の竹林院に仮寓しており、得度を行ったのは、座主の引継の日でもあって、拂曉かなりの山路を歩かねばならなかった。当日の公円の日程を彼此難する向もあるが、山内の生活を熟知している者からすれば、こうした日程は日常茶飯事であるという。

叡山の修学 道元は十三歳にして上山したものの、十四歳の得度であるから、宗学の履修はそれ以後ということになる。当初横川の般若谷の千光坊に紹介されたものの、直ちに解脱谷の公円の自坊にあつて、日夜坊中の諸僧と俱に、天台の学生としての修行をしたものと考えられる。ここでの修行の課程は、並大低のものではなく、期間は『学生式』によって十二年間、尤も道元の時代は二十年に変更されていたので、その修行を必要とし、前期六か年は教義を研鑽する聞慧を主とし、併せて修慧を修めることとなり、毎日三分の二は内学、残りは外学という厳しい課程であつた。

更にこれらの教育は、組織化された三塔・十六谷の区域の下で進められるので、道元は横川の解脱谷に属し、毎日自坊にて師匠について修行し、その結果を定期的な、横川の本堂で論義（試験）されねばならなかった。論義の内容は、『宗要算』『俱舍論』『法華経』によるもので、道元は幼少の頃漢学の素養があつたにしても、相当の負担であつたことはいうまでもない。

かくして道元は、在山三年の後、建仁寺の榮西の下に参学したものの、叡山と縁を切つたのではなく、建仁寺と叡山の間を往復し、絶えず、叡山教学の傘下にあつて修業した。尤も一説には在山三年十五歳にして下山したとする向もあるが、正規の修業は得度後であるので、上山の翌々年に下山するということは肯えない。如何に英敏なる道元にしても、僅か二年にして、叡山教学の根本を把握されるわけもなく、またそれ程尻焼けのする道元とは思われない。榮西に参学してから、叡山の席の有無は別として、叡山教学とかかわること、前後六年ということとなろう。

入宋・如浄参學 一応建仁寺の榮西に参学して、その人となりを敬慕したとはいえ、円・密・禅三教一致の榮西である許りでなく、片や鎌倉の行化や、東大寺の大勧進寺も兼ねていたので、道元の直接の指導は、榮西の資明全に委せられていた。だが叡山の修行で仏法にかかわる疑問も解明されないで、一挙明全と俱に入宋求法の途についた。

「本来本法性、天然自性身」に対する、大疑團を心に秘めて入宋し、本師如浄の伝法を受け、身心脱落・脱落身心の妙境を体得して帰朝した。その間留学の費用はいう迄もないが、木下道正、加藤四郎左衛門など、多くの従者の滞在費を考えると、莫大なものとなろう。もとより、久我、藤原両家の負担抛出であろうことはいうまでもないが、私は尚一つの

憶説を提起したい。

曾て發表した「道元と源實朝、本覚尼のことども」で触れたように、何程か道元と実朝とのかわりがあるのではなからうかと思われることから、実朝の室であり、藤原氏出自の本覚尼が、終始道元の支援者ではなかったのかということである。

道元が宋より帰朝後、席暖まる暇もなく、紀州由良の西方寺の寺額を書いたことであり、由良の近くの湯浅に実朝の領地がある等のことから、或は道元、実朝、本覚尼と一連のかわりはないものか。そして深草・興聖寺の法堂の寄進者正覚尼は、実朝の室本覚尼ではないのか。道元はかつて始覚・本覚の本覚をとなえたことはなく、常に正覚としているので、本覚尼のことを正覚尼と表したのではなからうか。或は永久に解けない謎かもしれないが、道元と実朝、そして本覚尼を一連の下に捉えておこう。

興聖寺の開堂 道元は宋より帰朝後一旦建仁寺に落着いたものの、意を充たすことが出来なかつたので、深草の辺りに庵居して、専ら聖諦の長養に勤しむこととした。偶々極楽寺の塔頭観音導利院が廢寺同様の状態であつたので、在来建物に更に正覚尼の寄進によって、法堂などを建設して止住した。名づけて観音導利院興聖實林寺といい、わが国における最初の曹洞宗の選仏道場として、社会的活動の第一歩を踏み

道元禪師と比叡山にかかわる諸問題（寺屋）

出した。

ところがどうしたことか、観音導利院復興の勸進疏の外、興聖寺での十回の示衆などに、雍州宇治郡（県）何々としてゐる。雍州は山城の唐朝風の麗辭としてよいとしても、宇治郡は理解に苦しむ。古来深草の地は、『延喜式』を始めとして、諸書皆紀伊都とし、かつて宇治郡としたものは見当らない。或は宇治郡山科と紀伊郡深草は、小山一つ隔てた地理的環境にある許りでなく、宇治郡木幡の基房邸や、先妣隠棲の地木曾坊に対する郷悠から、敢て宇治を使つたのかもしれない。それかといって、深草・興聖寺が宇治郡内に在つたのかというと、現在の寺跡以外によれらしいものは見当らない。これも亦解けない謎の一つかも知れない。

何れにしても、深草・興聖寺のあつたことは事実であり、居ること十年余にして、その根幹は北越に移つたが、若干の僧は断続的に止住して、細々と寺を維持して来た。曩に別途「道元開創の深草・興聖寺とその寺跡」に於て詳述したように、彼此二百年位は続いたものと思われ、その後は幻の寺として寺跡さえ判らなかつたが、研究調査の結果、明確化したことはいうまでもない。ところが洞門の碩学でさえ、今尚「宝塔寺の辺り」という。どうしたことであらう。

北越移錫と比叡山の対応 道元は深草・興聖寺を開創して、積年の宿願を果すと共に、嘉禎二年十月、祝国開堂を行つ

道元禪師と比叡山にかかわる諸問題（守屋）

て、道元の仏法を、社会的に顕揚宣布することとなり、尔来盛んに僧俗の教化が進められた。しかし道元の存意は、僧俗の教化もさること乍ら、僧俗に対する坐禪一貫のことは年来の宿願であり、偶々法嗣懷辨等の配慮もあって、一挙北越移錫を決定した。かねてより法然、親鸞、榮西寺叡山の出身者でさえ、その立宗に心好からぬ叡山山僧の動搖により、夫々官の制裁をうけている折柄、今かと許りに道元は叡山山僧の圧迫によって、寺を棄てさせられた上、洛中をも迫放されるという、あらぬ噂がたてられた。かりにそうした噂があったとしても、それによってためろうような彼ではない。もとより北越移錫は道元の發意であり、世評など何等の影響も与えなかった。噂の元凶とされる文書は、「被棄」と読まれるものを、一大形に吠えれば、万犬声に吠えるということで、被棄が被棄・破却となり、焼却となったことは、嗤うに嗤えないことである。道元は断じてかかる噂に左右されたものではない。あくまで道元の翻意に対して、傘下に参学した懷辨等、越前波著寺の面々と、領主等の強い勧奨と、越前の延暦寺下白山天台に属する寺院・衆徒に対する、根廻しのよさである。わけで延暦寺側の好意ある所遇は、道元が上奏した「護国正法義」の審査の経緯を伝える、『溪嵐拾葉集』の記事によって、十分窺うことが出来る。

白山天台の支援・協力 道元の北越移錫に幸したのは、外

ならぬ越前波著寺の龍匠であり法嗣である、懷辨、懷鑑寺の外、領主波多野義重の勧奨であることはいうまでもないが、わけて波著寺ともかわりのある、平泉寺等一連の白山天台の支援協力を見逃してはならない。深草を發つて志比庄に落着く迄の、電光石火の行動は、延暦寺傘下の平泉寺一連の協力支援が無かったなら、あれ程の短日月の間に、最後の拠点吉峰寺に落ち着くことは出来なかったであろう。思い立ったが吉日と許りに、寛元元年七月、思い出の深い深草・興聖寺を出發し、同月末頃志比庄に到着、翌閏七月一日席暖まる暇もなく、白山天台の一拠点平泉寺末の禪師峰頭で、越前における第一声として「三界唯心」を示衆、同年九月頃から十一月十三日迄の間、吉峰寺に於て「説心説性」など十三四の示衆をなし、同月十九日から同年中は、禪師峰下の茅庵等で「見仏」など五回の示衆とされている。

ともかくもこの頃道元は、吉峰寺と禪師峰等の間を往復していたものの如く、その熱狂ぶりは、尋常の沙汰ではない。いうまでもなく、道元が往来した平泉寺傘下の諸寺院は、延暦寺の支配下であると共に、白山天台の主流越前の拠点である。こうしたところに悠々として、しかも難解とされる示衆を、矢継ぎ早にしたところに、北越移錫の鍵が秘められているといえないわけもあるまい。たとえ道元がいかに競い立ったとしても、これらの支援・協力が無かったなら、これ程円

満に且迅速に事は運ばなかったであらう。

叡山教学と伝戒・伝法 最澄は当初行表から達磨の一心戒と
うけ、後入唐して道邃から円頓大戒を相承した。ところが当
時中国の伝戒は、智顗を始めとして、具足戒と菩薩戒によ
る兼受菩薩戒であったが、帰朝後単受菩薩戒を企図し、一乘
戒坦の創設を志した。寂後勅許によって、わが国における単
受菩薩戒の端緒となった。

ところが道邃からの伝戒が、義真と俱であったために、勢
い最澄と義真の二法系となり、最澄の流れは円仁を経て担那
流（東塔）と、恵心流（横川）とに分れ、更には黒谷（西塔）
相伝の円戒となるなど、幾多の分流となったものの、共に
漸次退潮となることを免れ得なかった。

一方道元は、(一)公円から天台円頓戒相承の戒脈を、(二)栄
西、明全相傳の南嶽会下の戒脈を、更には(三)如浄から青原下
所伝の戒脈を受けたように、都合三系統の戒脈を受けたが、
その内容は三種三様とも考えられよう。つまり(一)は、最澄系
に係わる梵網の十重四十八輕戒の、単受菩薩戒としての、円
頓菩薩戒であり、(二)は栄西の戒・密・禪を以て立つ、黄龍派
の兼受菩薩戒であり、(三)は単受菩薩戒とはいいいずら、中国通
途の兼受菩薩戒ではなかったのか、なども考えられる。

かくして道元は、師資相承による如浄の単受菩薩戒に立ち
乍ら、片や最澄の円頓戒を顧みつつ、敢て、三帰・三聚淨戒

道元禪師と比叡山にかかわる諸問題（守屋）

・十重禁戒の十六条戒を、三字の定に絞ることによって、必
至的に只管打坐・即心是仏の至妙処を確保することとした。
いうならば、客観的な修と、主観的な証との道環融合によっ
て、修証一等の只管打坐（事相）と、即心是仏（理相）とを、
相即的展開として捉えたのである。要するに道元は、始覺・
本覺を止揚して正覺とし、あらゆる矛盾を超克して、直観的
に諸法実相、現成公按を射止めて、普遍的には即心是仏を、
実践的には只管打坐を根幹とした。しかし時には「洗淨」の
巻の示衆の如く、道俗の家常の一齣一齣に、仏法を浸透せし
めて、その顕然化を図ることに吝かでなかった。

四種三昧そして只管打坐 叡山における坐禅は、『学生式』
の止観業に基づく、四種三昧中の常坐三昧（唯坐のめ）、半行
半坐三昧（坐と行とを交互に）、非行非坐三昧（坐と行との定規
なし）などによったのであるが、斯る状態ではともすると分
立分散しかねない脆弱さがあり、難より易に遷り易い傾向を
馴致しかねないので、坐禅を集中的に貫徹することは、到底
不可能ということにもなる。

最澄の在世中、坐禅を専修したものは、円仁設営の常坐三
昧があるが、これさえ九十日を一期とする安居の態様に等し
く、次で設けられた文殊楼院の如き「禅院未營」とするところ
から、坐禅専修とはいいい難く、また後の法華三昧中に包
含されるとしても、画然とした坐禅専修の跡は見られない。

大勢は『溪嵐拾葉集』に見られるように、坐禪の実修を鈍らせた誘因をまつ迄もなく、台密・浄土さては修験等の犇めく中にあって、漸次後退したことはない。

一方道元は、本師如津の真伝を根基として、叡山に伝わる天台智顗の直末、最澄伝来の常坐三昧に培われたこはいうまでもないが、むしろ夫等を酵母として、大胆率直に只管打坐を打出した。曾て入宋中智顗の坐禪に直面し、「光前絶後なり。」という、確信の程察すべきであろう。尔来日日研讀して体得を重ね、遂にせずにはいられない行であり、自己の正体であるとして、仏法の総府とし、また道俗の別もあろう程に、如津の垂示を顧み、坐禪の中に於て衆生を忘れず、乃至昆虫にも慈悲をたれ、あらゆる功德を一切に施す(『寶慶記』等取意)ことを信条とした彼は、坐禪は単なる個人の行に終ることなく、常に衆庶に廻向するものであるとした。いうならば坐禪は如浄の願いである許りでなく、智顗乃至は叡山教学にも契合するものとして、多大な抱負と敬虔なる態度を以て、坐禪専修に踏み切ることとした。

尤も叡山に於ては、上述の通り坐禪専修の影は薄かったが、皇覺の『枕双紙』におけるが如く、諸法実相を踏えて、草木成仏を語り、或は「讀時即断惑」として、誦経三昧に於て、純粹直感の境地を打ち出し、また恵心は『止観坐禅記』に於て、「空觀現前名成仏」とするように、道元の思想に

契合するもののあつたことは、見逃せない。しかし『溪嵐拾葉集』に於ても、叡山に於て坐禪の普及しなかったのは、最澄が中国から伝授されたものであるというに止まり、その成果が伝えられていないことは、また叡山教学の一側面を伝えたものともいえよう。

道元の只管打坐を基幹とする、諸仏諸祖の破顔微笑の行履は、「唯仏与仏、乃能究尽」することであり、そうすることによって、直ちに「以心換心なり、以仏換仏なり。」(「三十七品菩提分法」という。これを達意的にいうなら、家常の一切は諸仏諸祖の行履であり、当面する事々物々は皆全生命の躍動であり、仏法的な举措である。だから「生也全機現、死也全機現」(『廣録』)ということにもなるう。

要するに、叡山は九十日を一期とする、常坐三昧の外、非行非坐三昧として、行住坐臥を論じない生活即三昧に終始したものの如く、道元は年中無休の坐禪に踏み切つて、全生活を賭けての、徹底した成仏国土の顯現を期待したものといえよう。

只管打坐の中核としての即心是佛、道元は事相として外境的な行動・実践を根基として、只管打坐を打ち立てると共に、また理相として内境的な中核として、即心是仏を捉えることを忘れなかった。只管打坐は動仏としての、存在的な帰結であり、即心見仏は靜仏としての、当為的な誘因である。この

二つの極は別個の次元に属し乍ら、彼此融合的に確保することによって、動仏は動仏なりに、静仏は静仏なりに機能化して、完全なる人格的挙措となるわけである。いうならば総相として、即心具仏たることによって、別相としての只管打坐が成り立ち、只管打坐が即心是仏を確保することによって、一行三昧として、仏法の究極を確保することとなるろう。

即心是仏というテーマは、叡山に於ても風に円珍の『諸家教相同異集』に於て、即心是仏は最澄が唐に於て修得したものといい、また恵心も『妙行心要集』に於て、経をひいて「心想^{云々}仏時、是心作^レ仏、是心是仏、諸仏正遍知海、從^ニ心相生」とする等、一応即心是仏に即応するものもある。しかしこうした円珍にしても、恵心にしても、概念的に尽し得たとしても、行動的・実践的にどれだけ徹底していたことが明らかでない。殊に夏冬九十日の常坐三昧が主柱となり、後また法華三昧の中で履修されたとしても、半行半坐三昧が定着するような状態の中にあつて、坐禅の在り方に問題を投げかけていることはいうまでもなからう。

道元の真骨頂は、即心是仏を發菩提の中核として、必至的に行持の一環として、只管打坐たらねばならぬという。即心是仏の本意は、あらゆるものをあらゆるものたらしめるもので、換言すれば仏性にも通ずる肝心というべきであらう。即心是仏と只管打坐とは、宛ら糾える繩の如きものと見るとこ

ろに、道元の真面目を汲みとらねばならない。

永興庵 道元の示寂に伴い、詮慧等の手によって、京都東山の高台寺の三昧処に於て茶毘に付せられ、同地と指呼の間における、現円徳院の境内に、永興庵（寺）を開き、のち宇治・興聖寺に奉遷された、道元の倚像を安置して、只管その冥福を祈った。その位置については、彼此難ずる向もあるが当らない。

道元と叡山の人的環境 中古の叡山は藤原氏との係わりが多く、十八代天台座主良源は、藤原師輔の外孫で、のち村上天皇となられた皇太子の護持僧となつたことを始めとして、師輔の外護は一段と強化され、師輔の子尋禅が十九代天台座主となると、師輔の莫大な莊園を施入するの外、藤原氏の子弟の多くが、上山出家するなど、漸次叡山と藤原氏の関係が緊密となり、道元の場合、外祖父系が藤原氏のみならず、父系の室・側室など、藤原氏を以て占められ、また度重なる藤原氏出目の天台座主・門跡などが輩出して、網の目状にかわりあつて、道元はそのかわりを拒むにしても暗黙の内に道元に幸いしたことと考えられよう。尚委しくは拙著『道元禅師研究』の外、叡山学院研究紀要八・一〇・一一・一二を参照されたい。

△キーワード▽ 道元、比叡山、藤原氏

（叡山学院教授・文博）